よつて變つたものが隨分多くあるです。雄の蜂鳥の一種は殆んど極樂鳥にもまけない程美しい鳥であります。その飾の種々あることは實に著しいものでありましてその羽などはことごとく此裝飾といふ目的に適ふ樣に出來てるのです、だから其羽の變化の著しいことゝいふものは實に驚くの外ないです。第二及第三圖は所謂雄が非常なる變化を有しその美しい奇妙な外形を持つて居るといふことの例としてあげて見たのです。斯樣な美しい飾り物があるものですから人によく珍重かられて飼はれるとのことです。この類はすべて西半球の產でありまして合衆國には殊に多いそうです。（未完）

# 史傳

## 大題小題二

米溪

### サーモピレーの戰（承前）

エフアイアルツの敵將の床前に致さるゝや、大金を求めて曰く、請ふ、一の山徑を告げん。此の要區を衝けば、敵は之れ囊中の物、其の苦戰想ふべきなりと。ザーキジス乃ち、其の將ヒダーチスに命じ、一隊の兵を率ひて其の通路を固めしめ、輕騎を分ち枚を銜て夕に發し、丘麓を繞り、稠林を穿て進ましむ。

鷄鳴曉を催して、晴風四境を互り、天地寂と

して、夢靜かなるに當り、山逕の守兵、忽ち、滿逕の落葉、索々聲あるに驚けり、跫音既に枕頭に在り。驚愕措を失し、走て營を出づと雖とも、矢石雨下、面を向くべき樣もなく、潰走、皆、山頂を指しぬ而して波斯の兵之を逐はず、直に進んで山を下る。

天明、希臘の哨兵、森林の側を流るゝ河水の、煌々眼を眩せしむるを見る。之れ日光の細波に浴して、金漣を湧かすにあらず。敵軍山を亘るの甲冑劍戟、太陽と相映發して影水中に落つるなり。

是の時に當りてや、シムマリー人、亦ペルシャの陣營より窃かに墻壁を越て來り、山逕は遂に扼せられ、敵將山を攀ちて將に東門より殺到せんとするを告ぐ。時正に初卯、山路迂曲、直ちに達する能はず、其の希臘の陣後に到るは、正に下午に在らんとす。若し夫れ敵人の圍を受くるを欲せざれは、乃ち逸出するを得べきなり。

詰朝の祀、己に終りて、希臘の營には、是に簡短なる會議を開く。而して陰陽師メジスチアス、龜卜によりて、戰に利あらざる事を說く。レヲニダス、乃ち命じて退き去らしめんとす。蓋し、到底守るべからざる地域を捨るは、決して通常人の恥とすべき所にあらざれはなり。然りと雖とも、メジスチアス固く執て動かず、獨り其の一子を遣り還し、竟に自から去ることを肯ぜざるなり。

レヲニダス是に於てか、其の全盟軍に令し敵の歸路を絕たざるに乘じ、速に引き退かしめ、而して、己れ其の部下のスパルタ人と共に、靜に、此處を墳墓と覺悟して止まれり。

謂へらく、死あるのみ。粉骨碎身の勞も、命を

惜みては寸功なけん、希臘に酬ゆるは唯此の時あり。と。

全盟の諸軍總て退くに同じ、唯八十のマイセニー人と、決してレヲニダスを見捨てずと揚言せし七百のセスピアン人と、四百のシーバンス人を殘せるのみ。（三百のスパルタ人、各自少くとも一名の奴僕を從ふるを以て、其の數甚だ精密ならざるも）總兵大凡千四百、堂々是に二百万の敵軍を迎へんとす。精氣天に冲りて、威風山澤を壓せずんばあらず。

スパルタの陣中、レオニダスと同じく、ハーカルスの種族なる、二人の親屬の從へるあり。レオニダス之を助けんとし、スパルタの音信を齎らして、遣り還さんと擬せしに、彼等は竟に肯んぜず。一人は凛然、其の言を斥けて曰く、吾人は戰はんが爲に來れり、敢て書信の使たらんとにはあらざるなりと。他の者は曰へり、我は總てスパルタ人の知らんと欲する所のものを行はんと。

スパルタ人、ダイニセスと云へる者あり。襲來の敵兵、山に亘り、野を蔽ひ、放つ矢さへ空に滿ち充ちて、天日爲に暗からんとすと聞くや。哄然大笑して曰く、好し以て、凉しき日蔭に戰ふを得んと。

スパルタの雄兵三百、其の二人は眼を患へ疼痛忍ぶべからざるものあり、遂に近村に送られて痾を養ひしが、ユーリタスと名くる一人は、蹶起して甲を鎧し、從者を促して、陣に導き、戰列に加はらしめぬ、唯他のアリストデマスなる者は、病重くして、同盟軍と共に退きたり。

全軍既に營を徹して退くべきは引き去りぬ。而

して日未だ甚だ高からざるなり、レヲニダス乃ち最後の糧を命ず、青風陣頭を渡りて、馬も聲なく朝暉鎗刀に落ちて、千軍眸を凝す。レヲニダス乃ち大聲呼で曰く、今夜、請ふ諸君、閻魔と共に夕餐の卓を共にせんと。

選兵千四百、意氣斗牛を衝くも、今夕は盡く之れ無定河畔の骨。一死國に酬ふの意氣、愛すべきと共に、妻子兄妹を殘して、此の陣頭に立つの胸臆を察すれば亦悲むべきものなくんばあらず、然りと雖とも、既に此に至る、今日の事唯國家あるのみレヲニダス嘆喟幾回、遂に衆を提けて胸壁を出て、堂々敵を俟たんとす。謂へらく、矢種の在らん限り、刃の續かん程は、力限り、根限り、敵を屠りて、希臘人の名を聞きても、震慄するに至らしめんと。（未完）

# 文苑

## 人の世

佐々木信綱

木かげにうたふ老し人
芝生をはしる若き子ら

花の香、人を醉はしめつ
鳥の音、むねををどらせつ

春の色あふれたり空に
春の光みちたり野邊に

のどかなりや人のこの世
たのしきかなや人のこの世